

パスカルの社会観：「想像」を媒介として

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部

<https://doi.org/10.15017/127>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 9, pp.17-24, 1982-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

パスカルの社会観

— 「想像」を媒介として —

上 田 富美子*

La société humaine de Pascal

— Les lois et la justice par
l'imagination —

Fumiko Ueda

パスカルの「パンセ」の中には人間社会について論及した断章がいくつかあり、これらは全篇の中で半ば独立したユニークな部分を形成していると言える。それらには当時の不穏な政情の中を身を以て生きたパスカルの肉声がひびき¹⁾、その意味でも興味深い箇所であるが、問題はやはりそうした事態を突き抜けて、人間本性の根底にまで届いているパスカルのまなざしであろう。その容赦のない徹底性は、ある戦慄をさえおぼえさせる。いまここにその所説の片鱗なりとも描き出し、自らを顧みるよすがとしたい。なぜなら、私たちも同様に人間として、社会の中に政治の中に置かれていることは間違いないところであるから。

「私のもの (*mien*)、君のもの (*tien*) — 『この犬は私のものだ』そう哀れな子供たちは言った。『そこは私の日向ぼっこをするところだ』 — ここに、地上のいたるところにおける纂奪の端緒があり雛型がある」(295) これは、パスカルの地上における所有の始元に関する言及である。本来誰のものでもあるはずがない土地に名がつけられ、誰にも所属しない動物が特定の人のものである。一見無邪気な要求にことよせて、パスカルはそれに続く醜い根を指摘してみせる。それは所有欲という根であり、

* 九州大学医療技術短期大学部

結局「エゴ」へと連なる根である。誰もが所有欲を免れず、誰もが自分の持ち分を主張すればどうなるのか。それぞれが異なるものを所有し、また所有でき、それで満足しているうちはいい。しかし欲望は一たん堰を切れれば歯止めがきかない。もっと多くを、もっといいものを人は望むであろう。所有の対象には限りがある。するとそこには、争いが起るのは目に見えている。ついには所有をめぐる万人の万人に対する争乱へと発展するであろう。そこで決着をつけるものとして「力」(*force*)が登場する。「力」による決着は、人々を二つの層に二分する。すなわち力ある支配者層と力に屈した被支配者層とである。こうして「階級」(*classe*)が形成されてゆく。パスカルの言うところを見よう。「すべての者が支配すること (*dominer*) をのぞむが、皆が皆というわけにはゆかず、そのいく人かの者のみが支配することができるのであるから、そこには異なったさまざまな段階 (*degré*) があるはずである。そこで、さまざまな段階ができはじめるのを我々が眺めるとしてみよう。たしかにそれらはお互いに争いあう (*se battre*)、そうしてやがて強い方 (*la plus forte partie*) が弱い方 (*la plus faible*) をおさえつけるにいたり、ついに支配的なるがわ (*parti dominant*) ができることになる」(304²⁾) このような関係が一たんできあがると、支配者たちは

その関係を固定し維持する方途を考える。すなわち、「ひとたびそれが決定すると、支配者たち (maîtres) は戦い (guerre) が続くのを好まず、手中にある力 (force) が自分に気に入るような仕方でも継続してゆく (succéder) ような秩序をたてる (ordonner) 」(304) こうして「力」にかわり「制度」や「習慣」、そしてその一そう明確なかたちである「法」などが成立することになるが、これらはいずれもここに見るかぎり、瞬発的な「力」の維持形態であり代替物であると言うことができよう。だが本来持続的でない「力」が持続的なものに変化させられた場合、そこには何らかの変質が起りはしないだろうか。また実際、「力」の代替物への移行はいかにして果されるのであろうか。ここでパスカルのいわゆる「想像」(imagination)の問題が大きく浮上してこざるをえない。パスカルは、さらに言葉をついて言う。「そこで、想像 (imagination) が役割を演じはじめる。それまではもっぱら力 (force) がことをなしてきた。これからは力は、フランスでは貴族 (gentilhomme)、スイスでは平民 (roturier) というように、ある党 (parti) における想像によって支えられてゆく」(304) と。では、「想像 (力) 」(imagination) はいったいパスカルによってどのように捉えられているのだろうか。つぎに、この点についての考察がはからなければならない。

パスカルの「想像 (力) 」についてのまとまった記述は、主として断章82を中心に見られる。パスカルは「想像 (力) 」をつぎのように定義する。「これは人間のうちにあって欺く部分であり、誤謬 (erreur) と虚偽 (fausseté) との主であり、つねには狡猾 (fourbe) でないのでそれだけいよいよ狡猾である。なぜとて、もしこのものが、虚妄 (mensonge) を示すところのまちがいない規準 (règle) であるならば、真理 (vérité) を示すところのまちがいない規準にもなるであろうから。しかし、このものはたいていの場合陰険 (faux) であって、真にも偽にも同じ印を押し、自分の特性 (qualité) を一向に印さない」(82) つまりパスカルによ

れば、「想像 (力) 」は一定の規定をもたず、正体不明の曖昧性をその特質とするというのである。たしかに「想像力」ほど確たる把握が困難な人間能力はあるまい。「認識」(connaissance)の土台としての「構想力」から、果ては「空想」(fantaisie)まで、その領域は確定しがたい。ある一局面に限定すれば、その相貌はやや鮮明さを増すかに見えても、つぎの瞬間には全く別の相貌を呈して私たちを困惑させる。まさに変幻自在の力というほかはあるまい。パスカルの上記の見解は実際、そうした「想像力」の特性に添うものであって、十分承認を得るものと言えよう。

続いてパスカルは、この「想像力」がその正体不明の曖昧さゆえに、かえってその強みを十分に発揮し人間を思うさまに操る様子を描いてみせる。「好んで理性 (raison) を支配する、この理性の敵、この壮大なる力 (puissance) は、人間のうちに第二の本性 (seconde nature) をすえて、自分がいかに全能であることを示した。この想像力は、人を幸いにし、不幸にし、健康にし、病気にし、富ませ、貧しくする。理性をして信ぜしめ、疑わしめ、否定せしめる。感覚をして休止せしめ、あるいは働かしめる。人を愚かにし、賢くする。この想像力はまた、その持ち主を、理性とは違った仕方でも、あますところなく十分に満足せしめるが、これを見ることほど我々にとってくやしいことはない」(82) ここには、明確な論理的規定性を身上とする「理性」(raison)に対して、私たちの期待と思い込みに反し、現実には無規定な「想像」こそが私たちを動かし、「理性」の保証しえないあらゆるものを分ち与えることが示される。無規定性ゆえに「想像」は、確実なものを選びすぐって手渡すことはできないが、そのかわり真偽の弁別という面倒な手続きを経ることなく、何でも望むまま即座に手渡してくれる。そこには、私たち人間は「事実」(fait)にじかにかかわることができず、何事にも「イメージ」(image)を介してしかかかわれないという事態への深い洞察が下敷になっていると思われる。「理性」も「感情」も、人間のことはみな「イ

メージ」を通過する。人間に懸けられたどうにもならない制約は逆に、特権的な力をもたらるのである。実際私たちの日常の大部分は、不確実極まりないところで一喜一憂し、妬み、怒り、悔み、尊大になり、卑屈になり、勝手な臆断を下し、疑心暗鬼に陥り、幻影のように過ぎ去ってゆく。してみると、パスカルのここでの指摘は、いかに大げさに聞えようとも、深く真実を突くものと言わなければならないであろう。

だがパスカルにおいて最も着目すべき点は、「想像」の恐るべき同化力に目を向け、これを人間社会とのかかわりの中で捉えた点であろう。上に引用した「想像（力）」についての言及の中に、そのことはすでに示唆されてもいる。すなわちここでは「想像（力）」は選り好みせず、無差別にあらゆることを行うことが示されているが、そうしたすべてを取り込み包括する力は、同化力にはかならないと言えるからである。それに対し、真偽を選り分け区別する「理性」は、異化の力と見なすこともできよう。してみると、区別を置かずものみなをおおい尽す「想像（力）」は、自他の垣根をも打ち破り曖昧にしてしまう恰好のものと言えはしないだろうか。その意味で「想像（力）」の社会との深い関係を見抜いたパスカルの慧眼は並々でない。さてそこで、このような「想像」のもつ同化力をうまく刺激し集約して、一つの社会を支える一致した力に転化できないものか—そのことを当然に支配者たちは考えるであろう。パスカルはこのような人々を至当にも「想像の賢者たち」

(sages imaginaires) と呼ぶ。パスカルの言うところを聞こう。

「有能の人々 (habiles par imagination) は、知者が理性をもって楽しむのとは全く違った仕方想像 (imagination) をもって楽しむ。この人々は人を見るのに権勢をもってする。この人々は、議論をするのに大胆と信念とをもってする。ほかの者は、恐れと疑いとをもってする。またこの人々は、快活な容貌をもって聞き手の意見をしばしば自分のほうに有利なものにする。想像の賢者たち (sages imaginaires) は、自分たちと性質を同じくする判定者たちが

らずいぶんひいきにしてもらうのである。想像は愚人を賢くすることはできないが、理性が自分の味方を見じめにするのに対抗し、愚人を幸福にする。自分の味方を、想像は栄光でおおい、理性は恥辱でおおうのだ。この想像を除いて—たい何が、人に、仕事に、法律に、偉人に名声を与えるのであろうか。このものの同意がないならば、地上のいかほどの富も不十分である。」(82)

ここで支配者たちは、あらゆる手を尽して人々の「想像（力）」を利用し、彼等がいかに特別に選ばれた者たちであり、支配者としてふさわしい者たちであるかという思い込みを与えようとする。引き続きパスカルが指摘しているように、そのためには凝った仰々しい服装などの道具立ても必要であろう。(断章82参照) こうして水も漏らさぬ入念な配備でもって、人々の「想像（力）」を彼等の欲するところへと導き入れることに一たん成功したならば、彼等は安泰である。ここでは「想像（力）」の無規定性こそが支配者によって巧みに利用され、「力」の代替物という支配者の思惑へと仕立てられてゆく。ただし注意されなければならないのは、この場合、そこにいかんなく発揮されている「想像」の同化力であろう。すなわちこの同化の力は、被支配者相互の境界をなくし、彼等を一団の「民衆」(peuple) に化すると同時に、その思惑を支配者の思惑へと結びつける。つまりそれは、支配者と被支配者との同化でもあり、ここに「想像（力）」を媒介にして一個の社会集団が形成される。「想像（力）」こそ社会化の原理なのである。したがって、支配者の「力」の代替物は、当然民衆によって支持されてもいる。民衆は「想像（力）」の独自性によって、それをほとんど自己のものと思い込み、喜々としてつき従う。彼等は、彼等から遠いはずであった「力」を「想像」により分有する。ここに端的な「力」による支配との根本的相違がある。「想像」はまさに民衆を「幸福にし」(rendre heureux), 「栄光でおおう」(couvrir de gloire) のだ。「力」はいわば、「想像（力）」を通じて社会の中に根をおろす。つまり「力」

の維持装置として新たに社会というかたちが与えられたわけであり、多数者からなる社会の支持を背景としたことは、「力」にとって一そう心づよいことに違いない。さてここからは、さきに示唆した「力」を「継続してゆく」(succéder) 方途としての「習慣」(coutume) や「法」(loi) まで、ほとんど一步の距離しかないことがわかるであろう。なぜならこれらは「想像(力)」によって道をつけられ、その流動性をまだ免れていない「力」の代替物を、一そう固定化したかたちと見なされうるからである。つぎにこの点について考察をすすめよう。

前述のように「想像(力)」は、支配者のぞむ「力」の代替物にまで民衆を導き入れ、無規定な大衆のエネルギーを一定の方向に向わせる上で大きな役割を果たした。それは言い換えるならば、瞬発的な「力」を固定化し持続的なものに変えてゆく第一段階を形成するものと言うことができよう。こうして一たん開かれた道は、やがて踏み固められ踏みならされて安定した傾向に向おうとする。すなわちここでは、おのづからなる心の習性が一定のかたちをつけなぞってゆくのだ。こうして「習慣」(coutume) が登場する。「習慣」は、「想像(力)」の切り開いたものを民衆の中にしっかりと固定しようとする。「法」(loi) は、それを分節化し一そう明確にする。実際パスカル自身、「習慣」と「法」との間にはほとんど区別を設けていない。(断章 294, 325 参照) 「法」は一たび成立すると、民衆を外から制約する「力」となる。こうして端的な「力」は「想像(力)」を媒介とすることにより、社会化、公共化され、社会の成員すべてを拘束する新たな「力」、すなわち「法」としてみごとによみがえったと言うべきであろう。そこには、「想像(力)」が道をつけた社会の成員あげての一致した目標が、明確なかたちをとって定着される。「想像(力)」は、一部支配者のみに帰属した「力」を共有の「法」に変形する。

ところで一部支配者の外的な「力」は、「想像(力)」を介して民衆の中に内在化し、「習慣」になり、ついに「法律」になることによ

て再び別のかたちをとって外在化されるが、してみると「想像(力)」こそは、一連の過程を内部から支える原理であったと言わなければならないであろう。だとすると、この過程の進行は「想像(力)」にいかなる変容をもたらすことになるであろうか。「想像(力)」はさきに見たように、「力」を変形し維持固定する上で独自の本性を発揮するものと言うことができたが、ではこのものは、「習慣」や「法」の段階においては消滅して果てるのであろうか。たしかにこのような安定形態においては、「想像(力)」の伸縮自在な力の威力が思うさま示されないのであることは十分予想できる。だがこのものが、「力」を変質して全く別のかたちへと導く不可欠のモメントであった以上、そこに成立するものの中には、それがたとえどのようなかたちをとるにせよ、このものは何らかの意味で保有されていなければならないのではあるまいか。それに無規定であることを特色とする「想像(力)」は、本来どのような形態をもとりうるものであり、その意味で安定し持続するかたちをも拒むものではないことは言うまでもない。では「習慣」や「法」において、「想像(力)」は実際どのような在り方を示すのであろうか。「法」と言えば直ちに連想される「正義」(justice) を手がかりに、この点についての解明をはかりたい。

パスカル自身、「習慣」ないし「法」と「正義」とは切り離せないと見て以下のように語っている。「民衆(peuple)はひたすら習慣(coutume)が正しい(juste)と信じる(croire)からという理由で習慣に従っている(suivre)」(325)、また「法律(loi)が正しいものではないと民衆に告げることは危険なことである、なぜなら民衆はただ法律が正しいものと信じてのみ法律に従っている(obéir)のであるから」(326) さて、ここにい

わゆる「信ずる」(croire)という言葉は実に示唆的である。しかも「信じる」主体は「民衆」であり、「民衆が信じる」ということが、「習慣」や「法」における「正しさ」、すなわち「正義」の意味を解明する上で大きな手掛りを

与えてくれはしないか。そのような予想を以てパスカルの考えを探っていると、つぎのような言葉に遭遇する。「習慣は、それが人々に受け入れられている (*être reçu*) というただそれだけの理由で、欠くることなく公正なもの (*équité*) となる。これがその権威 (*autorité*) の神秘的基礎 (*fondement mystique*) である」(294) すなわちここでは、もともと「習慣」に「公正さ」があるのではなく、その「受容」(*être reçu*) そのものが「正しさ」の保証であることが示される。それは一たいどういふことなのであろうか。パスカルは言う。「民衆 (*peuple*) は真理 (*vérité*) を見出されうるはずのものと信じてい (*croire*)、真理は法律と習慣とのうちにあると信じているがゆえに、これらの法律と習慣とを信ずるのである。そうしてこれらのものの古さ (*antiquité*) をば、これらのものの真理である証拠 (*preuve*) として取るのである」(325) ここでは「正しさ」が「真理」(*vérité*) と言い換えられているが、それが同時に「古さ」(*antiquité*) と見なされている点が注目されなければならない。直前の引用(断章294)と併せ考えれば、「習慣」や「法」は、それらが「民衆」によって受け容れられていた期間によってその「正しさ」、「真理」を保証されるということになる。それを「民衆」の「信ずる」という行為の側から見れば、「受け入れる」(*recevoir*) ということ自体が「信ずる」(*croire*) ということであり、その「信ずる」行為自身の積み重ねが「正しさ」を保証しているということになる。したがって「習慣」や「法律」を「正しいと信ずる」(326)とか、それらの中に「真理はあると信ずる」(325)という言葉の真の意味は、「信ずるから正しい」とか、「信ずるから真理である」という転倒したかたちこそあると見なければならない。すなわち、多くの人々(民衆)によって長期間受け容れられていたことが、「習慣」や「法」における「正義」(*justice*)の根拠である。受け容れる人が多ければ多いほど、受け容れた期間が長ければ長いほど、それらの「正しさ」は増大する。こうした実績その

ものが「正義」を決定する。してみると、「習慣」や「法」を内から支える「想像(力)」のかたちが、「正義」にはかならないと言うことができよう。それは「受け容れ」かつ「信ずる」という一定の行為を重ねることで、いよいよ「習慣」や「法」を強固なものにしてゆく。つまり「正義」は「想像(力)」の究極の在り方であり、「習慣」や「法」の内実そのものであると言うことができよう。

だが一方、このように「想像(力)」の究極が「正義」に収束することは直ちに、「想像(力)」の本質が隠れもなく露呈されるということにもつながる。なぜなら「想像(力)」は本来、無規定な曖昧性に立つものである以上、その本質を見極めにくい、この流動の様態がここでは、「正義」の上に一瞬固定されることによってその実態の把握が容易となるからである。実際、「正義」が「信ずる」という言葉で代表されるような、主観的思い込みに過ぎないということほど、「正義」の概念をいたく傷つけることはあるまい。ここで「正義」をも装うる「想像(力)」の恐るべき欺瞞性、狡猾さ(パスカルの「想像(力)」についての最初の定義に示されたような)があらためて明らかになると同時に、「想像」というものの実質を伴わない空虚な本性が際立てられてくる。だから当然パスカルは、「普遍的」(*universel*)で「不易な」(*constant*)「正義」を認めない立場をとり、「自然法」(*loi naturelle*)に対しても否定的な態度を示す。(断章284参照)

ところで、こうして「想像(力)」の欺瞞性が「正義」というかたちで極限にまでもたらされたとき、そこに再び浮上してくるのは、「力」という実体にかならないと言うことができよう。パスカルは、その事実を以下の言葉にみごとに集約している。「なぜ君は私を殺すのか。一だって、君は川のあちらがわ (*l'autre côté*) に住んでいるのではないか。友よ、君がもしこちらがわ (*ce côté*) に住んでいたら、私は人殺しになるであろう。そしてかようにして君を殺すのは不正な (*injuste*) こととなるであろう。が君はあちらがわに住んでいるのだから、私は

勇士 (brave) であり、することは正しい(juste) (293) 「緯度が三度ちがうと、法律はすっかりくつがえってしまう。子午線(méridien)が真理(vérité)を決定する。わずかの年月のあいだの所有(possession)が基本的法律を変える。権利(droit)はその期間(époque)をもっており、土星が獅子座にはいるとそれはある一つの罪(crime)のおこりを我々に示す。一すじの川(rivière)によってかぎられる笑うべき正義(justice)。ピレネー山脈(Pyrenées)のこちらがわ(deçà)では真理、あちらがわ(delà)では誤謬(erreur)」 (294) ここには、「想像(力)」を介して国家的規模にまで仕立てあげられた「正義」と、限界状況におけるそのまやかしとが痛烈なアイロニーをもって描き出されている。「正義」がその「想像(力)」のヴェールを引きはがされたとき、そこに立ち現われるのは、まぎれもない「力」なのだ。つまり「想像(力)」によって支えられた「正義」は実際の極限に立たされたとき、それが無に過ぎないことを否応なく突きつけられ、直ちに「力」に反転するということもできるであろう。極限状況では装飾や欺瞞は通用しない。端的な「力」と「力」のぶつかり合いがあるのみだ。したがって、ここにいわゆる「正義」は最早、「力」の別名でしかないであろう。すなわち、「人は正しいものをして力あらしめることができず、力あるものをして正しいものとした」(298)のである。そしてここではまた、「力」とともにむき出しの「エゴ」が際立てられる。「力」の根は「エゴ」へと深くつながっている。国家的「エゴ」は、民衆一人一人の「エゴ」をたしかに指し示す。してみると、「想像(力)」を介しての民衆の「力」の分有は、支配者との「エゴ」の分有でもあったということになる。この同じ根につながることで、民衆はむしろ喜々として支配者の思感に加担することができた。双方の「エゴ」が「想像」を通じて、社会を国家を、「法」を「正義」を形成し盛り立てたということになる。

こうして極限においては、「想像(力)」の無為無能があばかれ、その上に構築された「法」

や「正義」の無力が突きつけられる。仮の衣裳ははぎ取られ、その実質が隠れもなくあらわとなる。そしてすべては「力」へと反転し、「力」の本質である「エゴ」がむき出しにされる。だが「力」は「力」であり、それ以上でも以下でもないかぎり、それはいずれ、その真のありかがどこであるかをも明確に指し示さずにはおかない。なぜなら、「力」は決して偽ることをしないのであるから。「力」は民衆による「力」の分有を、その究極のかたちとして決して許しはしない。パスカルは言う。「ある男が川の向うがわ(au delà de l'eau)に住んでい、その男の王(prince)が— 私とは少しも争いをしていないが— 私の王と争いをしているという理由で、私を殺す権利(droit)をもつとは、これほど笑うべきことがあるか」(294)と。ここで「想像(力)」を介した「力」の共有が、単に幻想に過ぎなかったことが無残にあばかれる。そして「力」が本当は誰のものであったかが明らかになる。しかし、想像的加担であれ、加担した者はその責めを負わされる。いやむしろ、万能の「力」はそういう者にこそ、負担のすべてを強いるのだ。有無を言わせぬその本領を発揮することによって。だからここにおいて、あの「想像」の大がかりな装置が誰のためのものであったかも同時に明白になる。支配者の狡智は、民衆に「力」の分有の幻想を与え、その成果を自己のものとする。彼等は民衆に名を与え実を取ることで、いよいよその「力」を安泰なものとする。このように見てくると、「想像」の装置が支配者にとり、いかに都合でいかに巧妙なものであったかを認めざるをえない。民衆はただひたすら、支配者のための劇を演じさせられたに過ぎないということになる。してみると「想像(力)」と密接なかわりをもつ「法」や、その内実としての「正義」もやはり、支配者の揺ぎない権力を象徴し、それを確保するものであるということがたしかなこととなる。

以上端的な「力」が「想像(力)」を介して「力」の代替物へと移行し、再び「力」へと還帰する過程をたどったのであるが、最後にその

具体例を示してしめくりとしたい。パスカルは言う。「ひとはなぜ多数性 (pluralité) に従うか。多数性のうちに一そう多くの理由 (raison) があるからか。いな、一そうの多くの力 (force) があるからだ」(301) 多数決制における数の横暴が取りざたされる今日、これは何という卓見であろう。その先見性に目を見張る思いがするが、この主張の背後には、「意見」(opinion) のもつ暴力性への深い洞察が潜んでいる。「力こそ意見 (opinion) を成り立たせるのである。我々の意見によれば柔弱 (mollesse) ということはいよることになる。なぜ? なぜなら綱渡りをしようという者が一人だけいる。ところで、それは適当でないと主張する人々を以て私は一そう強い一団 (une cabale) をつくるであろうから。」(303) どんな事柄でも、多数をたのんで強引に押し通してしまう世論の暴力。ここには端的な「力」よりも、もっと醜怪な狡猾さがある。それだけそこに「想像 (力) 」の加担があるからで、ここには理由もなく寄り集まり多数派を形成し、世論をつくりあげてゆく民衆のすがたが写し出されている。したがって、とくにこの場合、支配者とその「想像 (力) 」の操作とが語られているわけではないが、それが背後にあることは十分予想できるところである。支配者は民衆の陰に隠れ、その「想像 (力) 」を十二分に利用する。民衆が寄り集まって「一団」(une cabale) を形成するに当っては、すでに支配者の巧智の働き掛けがあったに相違ない。こうして多数派が構成され、その中に埋没することこそ支配者の最も望むところであったと言えよう。かくて、さも民衆の意見のごとくに装い、支配者の意志は貫徹される。これこそまさに、支配者の企図する「力」の代替物への完璧の移行であろう。多数派が形成されると、民衆はこぞってこれに加担し、世論は構築され、少数者は圧殺される。何の正当な理由もなく。すべては「力」へと向う人間の本性のためであり、究極にあるのは、おのおの「エゴ」である。パスカルはここに、「多数性」と「意見」という恰好の例を得て、「力」の代替物の形成過程を如実に描いてみせ

るとともに、その裏に潜む「力」の構図をも適切に指し示した。³⁾ そしてその慧眼は、多数決原理に依拠する民主制すら、結局は力関係に過ぎないことを看破している。ここにはやはり、すでに述べた彼の所説の、一つの凝縮したかたちらが示されていると言わなければならないであろう。

さて以上、パスカルの人間社会についての見解をたどったが、ここで一応その素描を与え、骨格を示しておきたい。そこに写し出されたのは、一部支配者の「力」が、人間本性に潜む、無規定で曖昧な能力である「想像 (力) 」を巧みに利用して、自らの「力」の安泰をはかろうとするさまであった。ここで「想像」は一つの社会化の力として働き、支配者の思惑を民衆のものとし、社会の成員全員のものとする。こうしてそれは、共有の「習慣」となり「法」となって定着し、社会的「正義」の内実を形成する。だがしよせん、「想像」は「想像」であり、「力」は「力」である。日常にかけられた「想像」のおおいは非常の場合にははぎ取られ、そこにはむき出しの「力」があらわになる。そして「想像 (力) 」を通じての民衆の、支配者の「力」への加担は、結局「力」の分有を目指す彼等の「エゴ」の根をあばく。「力」が端的な「エゴ」のあらわれとするなら、ここにはだから、究極において、「エゴ」対「エゴ」の図式しかない。だが、「想像 (力) 」を介する民衆の支配者の「力」へのかかわりは、しよせん「想像」に過ぎず、いかに「法」や「正義」で身を装おうとも、「力」は支配者のもとを離れえなかった事実が非情にも示される。

これらの所説を通じて、パスカルの言いたかったことは一たい何であろうか。結局のところ、人間社会を成り立たせているのは力関係であり、その背後にある各人の「エゴ」であるということも明らかであろう。だがこれらは多分、パスカルの見解を縁どる枠組みに過ぎないのではあるまいか。問題はそこに盛られる内容であり、それは言うまでもなく「想像 (力) 」を中心とした主張である。この人間に懸けられた奇怪な力は、その正体不明の威力を十二分に発揮して、

華麗で醜怪な万華鏡のような世界を繰り広げてみせる。ここではあらゆるものが生起し、またたちまちにして流れ去ってゆく。責任も罪も、それを帰する実体がない。捉えようとしてもすべてはすり抜け、身をかまし、把握を許さない。だからそこでは、同じ事柄がきりもなく繰り返され、そして訳もなく移ろってゆく。こうして歴史は書かれ、また書き継がれ、書き替えられる。私たちにわかっていることは、この影絵芝居の操り手が、人間に深く潜む「エゴ」であるということだけである。だが「エゴ」とは何か。それはまた再び、不明の霧の彼方に没し去るしかない。しかしながら、ともかく、この一場の悪夢にも似た不明の世界こそが人生であり、人間社会なのだ。パスカルは指摘したかったのに違いない。

パスカルのこの戦標すべき所説は、「想像」の本性にふさわしく容易に定着しがたいと同時に、またそれに見合い余りに多くのことを含んでいるように思われる。人生を夢や幻にたとえる例は多いが、これはまさにそうした考え方を裏付けるものであると一応言うこともできよう。だが、これは単なる夢幻ではない。そこにこそ恐るべき点がある。つくられた影が、世論その他によって実体にまで仕立られ、既成事実として積み重ねられてゆく怖さ。しかもその責任の所在は不明であり、いく度も同じ状況に追いやられつつ、真に問われることのない罪を重ねる人間の恐しさ。そして、このような事態を招来した当事者は、ついに歴史の表舞台に姿を現わすことのない不気味さ。私たちがさし当って、パスカルの所説から引き出しえたものはこれらのである。不明に懸けられた人間であるからこそ、覚めてあることが最も必要であろう。パスカルはそのことを、身を以て告げ知らせている。

〔註〕

- 1) パスカルの生きた時代、すなわち16世紀前半は、「三十年戦争」(1618～48)、「裸足党」などに代表される地方の反乱、さ

らに「フロンドの乱」(1648～52)と争乱相つぎ、絶対王制移行期の不穏な情勢の只中であつた。

- 2) 番号はブランシュヴィク版の断章番号を示す。
- 3) 彼の「真空」(le vide)に関する所説、またその帰依した「ジャンセニスム」(jansénisme)の思想や信仰は多くの反論や迫害にさらされ、容易に受けいれられなかった。